

巻頭言（刊行の趣旨）

源氏物語と紫式部の研究において、清水好子氏（一九二一～二〇〇四年）の功績は大きい。昭和の研究史に残る国文学研究者であると同時に、幅広い活動をしてきた女性として、今なおファンが多い。しかし、その論文集は『源氏物語の文体と方法』の他になく、それ以後の論文の掲載誌も入手しにくくなり、戦後四十年余りの研究の全容を知ることは困難になった。そこで、清水好子氏の学術論文を集成した『清水好子論文集』全三巻の刊行を企画した。万葉集研究者であられる夫君、清水克彦氏にご相談申し上げたところ、「若い研究者の指針になるような、あなたが良いと思う本を作ってください」とのお言葉をいただいた。若い研究者向けには本の価格を抑えなければならないが、武蔵野書院が快くお引き受け下さり、克彦氏のご意向に添う形になった。

清水好子氏には、源氏物語と紫式部、中古・中世の文学作品や歴史に関わる多くの論文がある。それとは別に、女性学や歴史・文化に関わる幅広い活動と著作があり、数々のエッセイなどの名文でも知られるが、それらすべてを収録した「著作集」ではなく、学術論文を集成した「論文集」として刊行することとした。ご著書のうち、『源氏の女君』、『源氏物語論』、『紫式部』は、現在も（オンデマンド版などで）入手可能であり、再録しなかったが、ご本人が作りになった論集『源氏物語の文体と方法』収録の論文については、論集・初出雑誌ともに入手困難であり、他の論文と深く関わるので、年代順に配列してすべて収めた。

ジャンル・テーマ毎に分類して収める方法もあるが、清水好子という偉大な研究者が何を考え、どのように新しいテーマに向かったのか、その軌跡を示すことが重要と考え、源氏物語関係の論文は年代順にして第一巻と第二巻に、

源氏物語以外の論文は作品・ジャンル毎に配列して第三巻に収めた。また、第一巻には「清水好子略歴」、第二巻には「発表年次順 著書・論文目録」「著書目次一覽」を添えた。第一巻の書名『源氏物語の作風』は、「源氏物語の作風」と題された連作のあることと、「文体」「方法」「主題」そして「作風」へと文言を工夫しながら研究を進展させた経緯を示すものである。第二巻の書名『源氏物語と歌』は、後半のご研究において、物語と和歌、物語の和歌についての論が増加したので、第一巻と対比する意図で編者が名付けた。第三巻『王朝の文学』は、幅広い中古・中世の文学・歴史に関わる論を集めたものである。これらの書名(副題)が適切かどうか、ご本人の遺志に添うものかどうかはわからないが、一つの目安に思っただければと思う。

女性研究者の少なかった時代、清水好子氏にあこがれて研究を志した者は多い。その流麗な文体と説得力に酔いしれて、仮説までもが確固たる事実のように受け入れられる例も見受けられる。偉大な研究者の説ほど一人歩きし、後学に与える影響力は大きい。逆に、優れた研究者であれば論を発表する度に成長し研究は進展する。本論文集全三巻によって、一研究者の軌跡を知り、個々の論とその後の展開を、冷静かつ客観的に読み直し、研究者諸氏の今後の研究に活かしていただくよう願うものである。

二〇一四年 三月

山本登朗

清水婦久子

田中登

凡 例

- 一、所収論文には、掲載順に①～⑥⑨の通し番号を付し、副題を除いた主題名が同一の論文題名には、「②源氏物語の作風Ⅰ」のように、主題目の後にⅠ～Ⅲの数字を加えた。
- 二、所収論文は初出の雑誌などによったが、『源氏物語の文体と方法』（東京大学出版会、昭和五五年「一九八〇」）に収められた論考については、同書の本文を用い、ともに一部誤脱を訂した。
- 三、仮名遣いを現代仮名遣いに統一し、漢字の字体を、一部の例外を除いて常用漢字は新字体、その他の漢字は正字に改めた。その他、現在一般に使われていない表記を通行の形に改めた部分がある。ただし、論文中に引用されている他の著者の著作などの文字は改めないことを原則とした。また、適宜ルビを付した箇所がある。
- 四、所収の論文中に他の所収論文が引用されている場合、それが本論文集所収論文であることを明示するために、「本論文集②」「源氏物語の作風Ⅰ」や「本論文集②」のような表示をあらたに加えた。
- 五、以上の点以外には、論文中に引かれている『源氏物語』本文を含め、すべて当初の各論文の形のままとする。ことを原則とした。ただし、引用文や掲出和歌の形式を統一し、巻名や人名などについては同一論文内のみで表記や呼称を統一した。
- 六、所収論文の初出については、巻末の「初出一覽」を参照されたい。
- 七、本書の企画・編集は左記の三名の協議によって進められたが、その上で、各巻の担当者を次のように決め、最終的な編集にあたった。

第一巻 山本登朗 第二巻 清水婦久子 第三巻 田中登

目次 (『清水好子論文集第二巻 源氏物語と歌』)

巻頭言 (刊行の趣旨)

i

凡 例

iii

②0 源氏物語における場面表現	1
②1 源氏物語の源泉 準拠論	25
②2 作り物語から源氏物語へ	41
②3 古注釈から見た源氏物語——河海抄——	51
②4 源氏物語絵巻への道——吹抜屋台の構図をめぐる——	61
②5 源氏物語の本性と絵	77
②6 屏風歌制作についての考察	83
②7 阿仏尼たちと源氏物語	99
②8 光源氏論	109
②9 古典としての源氏物語——とはずがたり執筆の意味——	129
③0 紫式部——言語的時空の構築	165

③1 草子地からの考察	175
③2 朧月夜に似るものぞなき	191
③3 藤壺の死	207
③4 女子教育と源氏物語	217
③5 朧月夜再会	221
③6 源氏物語の歌——齋宮女御と女三の宮における——	231
③7 源氏物語と歌Ⅰ——「須磨」「明石」と続くこと——	247
③8 源氏物語と歌Ⅱ——作中人物の言葉——	263
③9 宇治の中宿り——作中人物の歌	279
④0 『源氏物語』の作風——藤壺と紫の上について——	291
④1 『源氏物語』と『栄花物語』——光源氏と藤原道長——	309
④2 物語の表現	323

第二巻 初出一覧

333

第二巻 解説 清水好子・研究の経緯と変遷 (清水婦久子)

337

発表年次順 著書・論文目録／著書目次一覧 (清水婦久子)

347

第一巻・第三巻 内容一覧

357

